

<原 著>

コンピュータを用いた社会的スキル学習教材の開発に関する基礎的研究

若松 昭彦*

発達障害児・者が社会的場面での適切な言動を学習するための課題に関して、実写によるビデオ場面集を作成し、発達障害者1名に試行した。その結果、1) グループ活動での会話場面で、相手の表情や視線などの様子を意識しようとする意欲が見られた。2) 最初は雑談の内容が全く分からない様子であったが、何度も聞くことで、その概要の記述ができた、等の対象者の変化が報告された。繰り返し視聴できるので、場面の状況や適切な行動のポイントなどを説明しやすい、人とのかわり方だけでなく、表情を読む、視線や語調の違いに気づく、気持ちをj知る、雑談の内容を理解するなどの課題としても使用できる利点があり、教材としての有用性が示唆された。しかしながら、日常場面への明らかな効果が見られたとは言えず、学習内容の定着やコンピュータ利用に適した設問内容・形式の検討、般化を促す支援方法の工夫などが、今後の課題として提起された。

キーワード：発達障害、社会的スキル、コンピュータ、ビデオ

I. 研究の目的

LD, ADHD, 高機能自閉症やアスペルガー症候群などの発達障害のある子どもや青年・成人に対して、対人関係やコミュニケーションの基本ルールを段階的に教えていく、社会的スキル学習（ソーシャルスキルトレーニング、以下 SST）の試みが近年増えてきており、指導用の書籍（國分, 1999；小貫・名越・三和, 2004；五十嵐, 2005など）や、場面や状況認知のための絵カード等も出版されている（ことばと発達の学習室M, 2002, 2003, 2004, 2006など）。しかしながら、これらの書籍や絵カードを参考にした指導では、例えば小中学校で指導を行うような場合、担当教員の知識・経験や、指導に配当できる時間などによって学習効果に大きな差が生じたり、実際に役割演技を行う場合には、同じ演技を何回も再現することが難しい、後で復習することができないなどの多くの問題点が予想される。

また、発達障害のある子どもなどに対する SST の実践報告は国内外共に見られるが（Chang, Tsou, Shen, Wong, & Chao, 2004；高橋, 2004；岡田・後藤・上野, 2005；繪内・宮前・馬場ら, 2005；高橋, 2005；Gol & Jarus, 2005；是枝・小谷, 2006；Chung,

Reavis, Mosconi, Drewry, Matthews, & Tassé, 2007；de Boo & Prins, 2007など）、これらの研究の多くは個別または小集団での指導である。そうした指導が可能な場やスタッフは、少なくとも国内では限られており、発達障害のある本人や家族のニーズに十分に答えきれていないのが現状である。

これらの問題に対しては、安定した刺激提示やフィードバックが得られるコンピュータの利用が有効であると考えられるが、コンピュータを用いた SST の学習ソフトは普及しているとは言えない。発達障害のある子どもや成人への SST の重要性が認識されつつある今日、1人でも、また自宅等でも効果的な学習が可能な、コンピュータを利用した実用的な SST 学習教材の出現が待たれていると言えるであろう。

そこで、本稿では、SST 学習教材の開発に関する基礎的資料を得るために、社会的場面での適切な言動を学習するための課題について、実写による SST 場面集を作成して、発達障害者1名に試行した結果を報告する。

II. 方法

1. SST 場面集の作成

実写による SST 場面集の製作を依頼してきた研究協力者の原案に基づき、Table 1 のような14のテーマ

* 広島大学大学院教育学研究科特別支援教育学講座

及びシナリオを作成した。これらの内容は、日頃、発達障害児・者とのかかわる機会の多い研究協力者が、これまで実際に見聞した経験等を基にして考案したものである。今回は、中学生くらいから成人までの利用が可能ないように、高校生段階を想定している。各テーマは、発達障害のある本人が適切な言動をしない場合、適切な言動をする場合の2通りのシナリオをペアにした構成になっている。ただし、テーマ⑤「上手に頼む」、同⑥「上手に断わる」では、適切な言動をしない場合のシナリオが2つずつ用意されており、計30のシナリオが作成された。

録画は、広島大学の演劇部男子学生3名と大学院生1名(テーマ⑦「自己紹介」にエキストラ出演)にモデルを依頼し、2007年7月に広島大学の講義室などで行った。シナリオを事前に演劇部学生に渡しておき、役決めや自然な会話になるようなシナリオ細部の修正、アドリブ的な会話の内容等は、彼らに一任した。撮影したビデオから、演技が自然であった30の場面を選択してDVDに録画し、SST場面集を作成した。各場面の長さは、シナリオによって異なるが、11秒から38秒である。

Table 1 SST 場面集のテーマとシナリオの概略

① 挨拶をする

朝の教室。生徒B、Cが2人で話している。

シナリオ1：生徒Aは黙って教室に入り、自分の席に座る。BとCは、変な顔をしてAを見る。

シナリオ2：Aは2人に笑顔で挨拶し、BとCも笑顔で挨拶を返す。

② 会話を始める

生徒Bが試験勉強をしていると、生徒Aが話しかける。

シナリオ1：AはTV番組の話題を話し続け、Bは困った顔をしてAの方を見る。

シナリオ2：AはBの様子を察し、励まして立ち去る。Bは微笑みながら礼を言う。

③ お礼を言う

先に教室に入ろうとした生徒Bが、後から来た生徒Aに気づき、ドアを開けて待つ。

シナリオ1：AはBを無視して教室に入り、Bは変な顔をする。

シナリオ2：Aは笑顔で礼を言いながら教室に入り、Bもそれに笑顔で応える。

④ 上手に謝る

生徒Aが席から立ち上がろうとすると、ちょうど後ろを通りかかった生徒Bに椅子がぶつかる。

シナリオ1：AはBに、「ごめん」とだけ言い、すぐに立ち去る。Bはムツとした顔をする。

シナリオ2：Aは申し訳なさそうな表情をして、Bに丁寧に謝る。Bは笑顔で返答する。

⑤ 上手に頼む

生徒Bが本を読んでいると、生徒Aが体育館シューズを借りにくる。

シナリオ1：Aは高飛車な言い方で頼み、Bはムツとする。Aは捨てゼリフを残して立ち去る。

シナリオ2：Aはなかなか頼めない。Bが用件を問うと、Aは困った顔をして立ち去る。

シナリオ3：Aは申し訳なさそうな顔をしながらも、はっきりと頼み、Bは快諾する。

⑥ 上手に断わる

生徒Aが1人で試験勉強をしている。生徒Bが来て、昨日のTV番組のことを話し続ける。

シナリオ1：Aはしばらく我慢していたが、突然大声で怒鳴りつけ、Bはあきれた表情をする。

シナリオ2：Aは困った素振りを見せながらも、Bの話に相槌を打ち続ける。Bは話し続ける。

シナリオ3：Aは話が途切れた時に、後で話したいことをその理由と共に言い、Bは了解する。

⑦ 自己紹介

4人が円になり座っており、生徒Aが立って自己紹介をする。

シナリオ1：場に合わない大声で、3人を見ず、無表情に話をする。

シナリオ2：はっきりした明るい声で、3人を順番に見ながら、笑顔で話をする。

⑧ 仲間に入る

生徒B, Cが話をしている。

シナリオ1 : 生徒Aは, BとCの深刻な話に急に加わろうとして断られ, 不満気に立ち去る。

シナリオ2 : BとCは笑いながら話している。Aは, タイミングを見計らって話に加わる。

⑨ 仲間の誘い方

生徒Aは, 漫画を読んでいる生徒B, Cをトランプに誘おうとする。

シナリオ1 : Aは下を向いたまま, 小さな声で誘うが, BとCは漫画を読み続ける。

シナリオ2 : Aは2人を見ながら, 笑顔で爽やかに誘いかけ, BとCは承諾する。

⑩ 物を分ける

生徒Aがお菓子を食べていると, 生徒Bが「おいしそうだね」と言う。

シナリオ1 : AはBの方をチラリと見るが, そのまま食べ続ける。

シナリオ2 : AはBにお菓子を勧め, Bは笑顔でお礼を言って, お菓子をもらう。

⑪ からかいへの対応

生徒Aが1人で思い出し笑いをしていて, 生徒Bが, その様子をからかう。

シナリオ1 : Aは突然椅子から立ち上がり, 激昂して怒鳴る。Bは驚いて立ち去る。

シナリオ2 : Aは照れ笑いをしながら, 穏やかに対応する。Bも笑いながら応答する。

⑫ 上手な聴き方

生徒Aが, 1人である先輩Bに話しかける。

シナリオ1 : AはBの話聞きながら, 唐突にBのメールアドレスを尋ねて, Bは驚く。

シナリオ2 : Aは相槌を打ちながらBの話聞き, 話が一段落した時に, アドレスを尋ねる。

⑬ 上手な褒め方

生徒Bが新しいTシャツを着て, 教室に入ってくる。

シナリオ1 : 生徒Aは大声でTシャツを褒め, Bは困惑する。他の生徒は笑いながらAを見る。

シナリオ2 : AはBに近づき, 普通の声でTシャツのことを褒める。Bは嬉しそうに応答する。

⑭ 窓口での質問

青年Aに書類の申請書が届いたが, 記入方法が分からないので窓口に行きに行く。

シナリオ1 : Aは, いきなり書類を担当者に差し出す。担当者は驚き, 困った顔でAを見る。

シナリオ2 : Aは明るい声で, はっきりと要件を告げる。担当者は笑顔で対応する。

2. 手続き

事例に対する支援の実施者は, A市相談支援事業の委託を受けた, B社会福祉法人のC氏である。2007年11月に, C氏より, 表情理解について, なかなか適当な教材が見つからずに困っているとの相談を受け, 表情理解学習プログラムの試作版(若松, 2006)と一緒にSST場面集を送付した。本事例は, B社会福祉法人でC氏が現在までに行った支援の結果を, 筆者の依頼に応じて提供してもらったものである。

Ⅲ. 結果

1. 事例の内容及び結果

- 1) 対象者 : 広汎性発達障害の診断を受けた30代男性
- 2) 目的 : アルバイト先におけるコミュニケーション

を円滑にするため,

- (1) 様々な非言語コミュニケーションの存在を確認する。
- (2) 「雑談」の内容を聞けるようにする。
- (3) 場面についての「具体的な記述」を促す。
- 3) 頻度 : 週1回, 1回の支援につき1テーマずつ進めていく。
- 4) 方法 : ビデオを視聴し, 次項の「分析シート」に本人が記入していく。ビデオの操作は本人が行い, 何回視聴してもよいとするが, 回数は分析シートに記入欄がある。

シートへの記入を終えたところで, 支援者が一緒に視聴し, シートに記述されていない(本人が気づいていないと思われる)非言語サインや雰囲気の変化等について, ビデオを一時停止させながら説明していく。

5) 分析シート：場面全体の概要、雰囲気の違い、適切な行動の選択、不適切な行動へのアドバイス、自分の似た経験、ドラマ中の雑談の内容の6項目について自由記述する。

6) 結果：この課題に先行して、表情理解学習プログラムを実施した。これは、対象者が自分のコミュニケーションの苦手さは、相手の表情が読めないことに原因があると自己分析していたことによるものである。実際に学習プログラムを行うと、全ての課題で95%以上の正答率を示した。これを踏まえて、表情の読み取りは本人が思っているほど直接的にはコミュニケーションの苦手さに影響していないことを説明した。また、場面や表情以外の非言語サインについて学習していくモチベーションを高めることができた。

下記の結果は、目的の(1)～(3)にそれぞれ対応するものである。

(1) これまで対象者の重点的課題として取り上げてきた「気持ち」については、分析シートへの記述が1回目より多く見られたが、他の非言語サインについては記述が見られなかった。2回目で、表情や視線について支援者が説明を行うと、それ以降の回では意識している様子がうかがわれた。グループ活動での会話場面でも、相手の様子を意識しようとする意欲は見られたが、直接的にそれが本人のコミュニケーションを円滑にするまでには至っていない。

(2) 対象者には、これまでの経験の中でも、現在のアルバイト先でも、雑談の内容が分からないという訴えが多く見られた。そのため、自分に興味のないことも含めて意識的に聞く体験を積み重ねていくことを、この教材を用いた学習テーマの1つにあげた。雑談の内容が分からないために、繰り返しビデオを見ていることも多く、1話の視聴回数が10回を越えることもあった。最初はその内容が全く分からない様子であったが、何度も聞くことで、自分でその概要を記述することができた。

(3) 同じことばでも、それに付随する非言語コミュニケーションや、その語調によっても意味するところが違うことなどを再度確認する意味を含めて、具体的な記述を行う課題を設定した。例えば、「笑っている」場面を、さらに具体的に記述するという課題を遂行するために、「笑い方」に注目させることがその目的であった。

さらに、対象者には、その発言や記述内容が具体性に欠けるという全般的な課題が長く存在している。そ

のため、自らの行動修正や生活改善に具体的な目標を持ってないあるいは持たないため、よりよい結果につながりにくいという経過があった。対象者のこれまでの生活歴を考慮すると、それを生きる術として用いることで自分の身を守ってきたことが推測された。当機関で行っている個別・集団の療育プログラムの随所で、「具体的に書く」ことを意識するように促している。

2. 結果のまとめと考察

1) 結果のまとめ

・グループ活動での会話場面でも、相手の表情や視線などの非言語サインの様子を意識しようとする意欲は見られたが、直接的にそれが本人のコミュニケーションを円滑にするまでには至っていない。

・初めは雑談の内容が全く分からない様子であったが、何度も聞くことで、自分でその概要を記述することができた。

・取り組みの期間もそれほど長くはなく、会話やアルバイトの状況に変化は見られない。

2) 考察

発達障害者のコミュニケーション支援や場面の読み取りに関しては、これまでは限られた素材の状況絵カードがあったに過ぎず、誰もが経験する可能性のある場面を用いた動画は大変に意義深いものであった。また、1つのテーマが、同一の導入場面から始まり、本人の言動とそれに続く周囲の対応のみが違うという構成になっていることで、それぞれの言動による影響や雰囲気の違いなどについて、課題として取り上げることが容易であった。テーマによって演技者の役が違うことも、当機関での取り組みの中では全く問題になっていない。今後、この教材のバリエーション(難易度や対象者の年齢、場面等)が増えることが期待される。

IV. 総合考察

本稿で紹介した事例は、実施期間が長いとは言えず、学習効果がまだ十分に現れていない可能性がある。しかしながら、対象者には、会話場面で相手の非言語サインを意識しようとする様子がうかがわれた。また、高機能自閉症やアスペルガー症候群の人々が時に訴えることがある、日常会話や雑談の内容が理解できないという悩みに対する効果も認められた。今後は、学習を続けたり、事例数を増やしたりして、学習が日常場面に及ぼす効果について、さらに詳しく検討していく

必要があるだろう。

実施者のC氏からは、今回作成したSST場面集に関して、いくつかの利点が報告された。例えば、繰り返し再生できるので、場面の説明や、適切な行動のポイントの説明などがしやすい、1つのテーマが、同じ場面から始まり、その後の本人や周囲の言動のみが違うという構成になっていることで、それぞれの対応による影響や雰囲気の違いなどについて、課題として取り上げることが容易であった、などである。和やかだったり、緊張したり、違和感などが漂ったりという場面の雰囲気や臨場感は、まさに動画でなければ表現できないものであろう。また、「この教材を利用するまでは、支援者が対象者に“視線が”、“言い方（語調）が”と説明しても、それが何なのかを実際の場面と組み合わせる考えることができなかったが、この教材を用いることで、それへの取り組みが可能になった。」「実際の映像を見ながらコミュニケーションの方法を確認できることで、対象者と支援者の間で共有できる情報量が圧倒的に増えた。」などの記述も、C氏によってなされていた。

また、日常場面で、人とのかかわりにおいて困っていることがあるものの、本人は困っていることを自覚できていないような場合もある。そういった場合、ビデオを第三者的に見ることで、自分の問題に気づく可能性もあるだろう。さらに、SSTではしばしば、実際のロールプレイで問題場面の再現や適切な行動の見本を見せる。生の人間のロールプレイでは、いくらシナリオがあったとしても、言動とも同じ演技は何回もできない。シングル・フォーカスであったり、何処を見てよいか分かりにくかったりする自閉症などの発達障害児・者は、1回のロールプレイでは場面把握すら難しいと考えられる。これらのことも、写実性、再現性が高く、一般に発達障害児・者が興味を持ちやすい(Gepner, Deruelle, & Grynfeldt, 2001)とされる動画を、学習教材として用いる際の利点であると言えるだろう。

ところで、特別支援教育の新学習指導要領では、社会の変化や子どもの障害の重度・重複化、自閉症、LD、ADHD等も含む多様な障害に応じた適切な指導を一層充実させるため、現行5区分（健康の保持、心理的な安定、環境の把握、身体の動き、コミュニケーション）、22項目の自立活動の内容に、他者とのかかわり、他者の意図や感情の理解、自己理解と行動の調整、集団への参加、感覚や認知の特性への対応などに関する項目が盛り込まれる。そして、「人間関係の形成」

の区分が新たに設けられ、各区分と項目の関連が整理される予定である（中央教育審議会、2008）。しかしながら、この「人間関係の形成」に関連する具体的な指導方法・内容については、障害の種類や発達段階等に応じた詳細な検討が、十分に行われているとは言えない状況であり、一貫性、系統性のあるカリキュラムも作られていないのが現状である。

このような最近の動向を考えると、本研究は、コンピュータを利用し、他人との具体的な関わり方だけでなく、表情や視線、語調などを読み取ったり、他人の気持ちを知ったりするなどの多様な課題も含んだ統合的、効率的な発達障害児・者のためのSST学習教材を開発しようとするものであり、教育や福祉の現場に大きく貢献する可能性を有していると言えるであろう。

今後の課題としては、1) 学習内容の定着やコンピュータ利用に適した設問内容・形式の検討、2) ビデオを見る前のテーマを理解できるような説明、学習後のロールプレイ等を付加するかどうかなど、事前・事後に必要な学習事項の検討、3) より広く適用できるエピソードの収集、4) 日常場面への般化の検討、5) 難易度や対象年齢などを考慮した、教材のパリエーションの増加などが考えられる。

【謝 辞】

本稿の執筆にあたり、快く御協力頂くと共に、事例の掲載を承諾して頂きました、B社会福祉法人、C氏、そして、対象者の皆様に心から御礼申し上げます。

文 献

- Chang, C. C., Tsou, K. S., Shen, W. W., Wong, C. C., & Chao, C. C. (2004) A social skills training program for preschool children with attention-deficit/hyperactivity disorder. *Chang Gung Medical Journal, 27(12)*, 918-923.
- Chung, K.-M., Reavis, S., Mosconi, M., Drewry, J., Matthews, T., & Tassé, M. J. (2007) Peer-mediated social skills training program for young children with high-functioning autism. *Research in Developmental Disabilities, 28(4)*, 423-436.
- 中央教育審議会 (2008) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(答申)。文部科学省。
- de Boo, G. M. & Prins, P. J. M. (2007) Social incompe-

- tence in children with ADHD: Possible moderators and mediators in social-skills training. *Clinical Psychology Review*, 27(1), 78-97.
- 繪内利啓・宮前義和・馬場広充・坂井聡・小林壽江・植松克友・西村健一・佐藤宏一・金崎知子・玉井昌代・杉山愛・馬場恵子・丸峯良子・水嶋由紀・田中栄美子 (2005) LD, ADHD 及び高機能自閉症児のための SST プログラム開発:平成16年度学部研究開発プロジェクト. 香川大学教育実践総合研究, 11, 125-139.
- Gepner, B., Deruelle, C., and Grynfeltt, S. (2001) Motion and Emotion: A Novel Approach to the Study of Face Processing by Young Autistic Children. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 31(1), 37-45.
- Gol, D. & Jarus, T. (2005) Effect of a social skills training group on everyday activities of children with attention-deficit-hyperactivity disorder. *Developmental Medicine and Child Neurology*, 47(8), 539-545.
- 五十嵐一枝編著 (2005) 軽度発達障害児のための SST 事例集. 北大路書房.
- 國分康孝監修・小林正幸・相川充編 (1999) ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校. 図書文化社.
- 小貫 悟・名越斉子・三和 彩 (2004) LD・ADHD へのソーシャルスキルトレーニング. 日本文化科学社.
- ことばと発達の学習室M (2002) ソーシャルスキルトレーニング絵カード1 場面の認知と予測と対処. エスコアール.
- ことばと発達の学習室M (2003) ソーシャルスキルトレーニング絵カード2 時間的, 空間的な文脈の中での場面や相手の気持ちの認知. エスコアール.
- ことばと発達の学習室M (2004) ソーシャルスキルトレーニング絵カード6 状況の認知絵カード2. エスコアール.
- ことばと発達の学習室M (2006) ソーシャルスキルトレーニング絵カード 状況の認知絵カード 中高生版1. エスコアール.
- 是枝佳世・小谷裕実 (2006) 軽度発達障害児に対するソーシャルスキルトレーニングの効果-社会的コンピテンスの視点から. LD 研究, 15(2), 160-170.
- 岡田智・後藤大士・上野一彦 (2005) ゲームを取り入れたソーシャルスキルの指導に関する事例研究: LD, ADHD, アスペルガー症候群の3事例の比較検討を通して. 教育心理学研究, 53(4), 565-578.
- 高橋和子 (2004) 高機能自閉症児に対するコミュニケーション・ソーシャルスキル支援: 乳幼児期から青年期に至るまで: Kの事例. 障害者問題研究, 32(2), 157-166.
- 高橋和子 (2005) 高機能広汎性発達障害児集団でのコミュニケーション・ソーシャルスキル支援の試み: 語用論的視点からのアプローチ. 教育心理学年報, 44, 147-155.
- 若松昭彦 (2006) 動画を用いた自閉性障害児・者の表情理解学習. リハビリテーション心理学研究, 33(1), 17-28.